

体験活動をもとに自ら課題に取り組み、共に考える 道徳の授業

著者	小林 雅彦
雑誌名	紀要
号	20(別冊)
ページ	160-171
発行年	2018-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000015

体験活動をもとに自ら課題に取り組み、共に考える道徳の授業

小林 雅彦

キーワード：道徳教育、道徳教育の指導

1. はじめに

平成30年度から「特別の教科 道徳（道徳科）」が、新指導要領の実施に先駆けて先行実施されることになっている。学習指導要領 第1章総則 第1 小学校教育の基本と教育課程の役割には、次のように書かれている。

2 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、次の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、児童に生きる力を育むことを目指すものとする。

(2) 道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること。学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達段階を考慮して、適切な指導を行うこと。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。

道徳教育を進めるに当たっては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらを育ててきた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、平和で民主的な国家及び社会の形成者として、公共の精神を尊び、社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人の育成に資することとなるよう特に留意すること。

ここでは、滋賀県近江八幡市立北里小学校での実践をもとに、これからの道徳科の授業のあり方について考えていきたい。

2. 小学校での授業の実際

(1) 北里小学校の校区について

近江八幡市の西部、日野川の下流に位置しており、豊かな田園地帯が広がり琵琶湖を校区に含むという自然環境に恵まれた地域にあり、平成25年度には創立110周年を迎えた学校である。地域

の方も協力的であり、学校が地域の中核として、また、ふるさとの学校として期待されている。子どもたちも、素晴らしい校風を受け継いでいくという思いを強くもちながら学習に取り組んでいる。

(2) 実践の概要

本実践では、次の2点を課題として、授業に取り組んできた。

① 児童が自ら課題に取り組み、共に考え生きようとする道德教育の推進

② 体験活動等を生かした多様な取組の工夫による道德教育の充実

道德の時間と各教科、領域、特別活動および総合的な学習の時間の指導との関連を見つめ直し、様々な体験活動等を取り入れることにより、道德の時間の充実を図っていった。また、体験を通して、子どもたち自身が、「人」「町」「自然」に関わることにより、自分を見つめ、共によりよく生きていこうとする姿を求めていきたいと考えた。「人」「町」「自然」で体験したことが子どもたちの内面に醸成されていくためには、個々の内面に根ざした道德性を育むことが大切であるとする。そのためには、価値ある「教科等における体験活動の充実」と「道德の時間の充実」を図らなければならない。体験を通して、人の心の温かさ、文化や伝統を大切に作る心、自然に対する畏敬など、「人」「町」「自然」に対してよりよい生き方を目指して関わっていこうとする子どもが育つことを願って授業に取り組んだ。また、「家庭・地域と連携の充実」を図っていくことも重要であり、望ましい連携のあり方も考えてきた。

上で述べたように、授業においては、①体験活動の充実 ②道德の時間の充実 ③家庭・地域と連携の充実 を重点に進めてきた。

①教科等における体験活動の充実

生活科や総合的な学習の時間などの授業をもとに、体験を「人」「町」「自然」の三点からとらえ実践に取り組んだ。例を挙げると、

【人に学ぶ体験】

助産師さんに命の大切さを学ぶ



自分たちが収穫したわらを使ってわら細工を学ぶ



【町に学ぶ体験】

地域の方に町の歴史を学ぶ



地域の不耕起栽培の稲作りを学ぶ



【自然に学ぶ体験】

日野川の自然に学ぶ



集団宿泊活動で海の生き物を学ぶ



教科等における体験活動を充実させることによって、子どもたちの学びが豊かになってくることは、「人」「町」「自然」に触れた学びの実践によって明らかになってきた。この体験と道徳の学習での道徳的価値とを関わらせて学びをつくっていくことにより、子どもたちは自分が取り組んだ活動の価値を見直したり、その意味や大切さについて考えを深めたりしていくことができた。

②道徳の時間の充実

先述した総則の中で「道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである。」とされている。その中で、道徳の授業をどのようにしていくかについて考えてみたい。

ア．体験活動や教科等を関連付けた授業

年度初めに指導計画を作成する上で、体験活動や各教科等の学習内容との関連を図っておくことが大切である。生活科で植物を育てたり生き物を観察したりする学習と関連付けて道徳の内容項目をどのようにするかを考えていく。平成30年度からは教科書が導入される。教科書会社が年間計画を立てているが、学校の行事や特別活動、総合的な学習の時間等を考慮しながら、計画を立てていく必要があると考える。

イ．資料分析の大切さ

子どもたちが、授業の中で出会う資料は、心を耕す上でかけがえのないものである。子どもと一緒に感動を体験し、思いを共有できれば、授業は素敵なものになる。子どもたちが、そんな資料と出会い、入り込んで深く考えていくためには、資料分析を十分にしておくことが大切である。一つの資料の中にも、いくつかの道徳的価値が含まれている。本時のねらいに確かに迫っていくために、価値に関わる場面と発問、予想される子どもたちの考えを想定しておくことが重要であると考えます。

また、資料にも、主人公の思いを共感的にとらえていくものや、葛藤をもたらして考えさせていくもの、感動的にとらえるものなど、様々なものがある。その特徴を生かして、子どもたちがねらいに向かっていくために、指導の手順や学習過程を工夫した。

例えば、展開の初めの段階やまとめを紙芝居形式やパソコンを使って提示したり、映像資料を視聴させたり、主題に迫る発問の仕方を工夫したりと、学年や子どもの発達に応じた教材の工夫や開発を行ってきた。

ウ．学年に応じた学習形態や授業形態の実践

学年の発達に応じて、机をなくして椅子だけで話が聞きやすいようにしたり、机をコの字型

にして互いの表情が見えやすくしたりして、授業に応じて学習形態を工夫した。また、高学年ではモラルジレンマの授業を取り入れた実践も試みた。

エ. 板書の工夫

子どもたちが発表した思いや考えを、本時の価値に迫っていけるよう黒板にどのように残していくか、また、一人一人を生かす板書の仕方を考え工夫した。資料分析と関わらせながら板書計画を作成し、学びがわかる板書を目指した。

オ. 心を育てる終末の工夫

授業で学んだことを心の中で温め、これからの生活に生かしていこうとする意欲や心情を育てるために、どのような形で授業を終わるのかはとても重要になってくる。教師の話しや体験談、保護者や地域の方からの手紙や話など、子どもたちの心に残る終わり方を考えてきた。

③地域・家庭との連携

一例であるが、「勤勉・努力」の価値項目について学ぶとき、家でのがんばり「子どもたちが、今、がんばっていること」について、お家の人に一言書いてもらい、授業の終末に紹介した。子どもたちは、その一言をうれしそうに聞いていた。そのことで、学習したことが、深まっていた。

また、地域の方からお話をしていただいたり、手紙や声のメッセージをいただいたりしながら授業を進めていった。

2年生の「ハムスター」（文溪堂）を使った「生命尊重」の授業では、弱っていたハムスターを一生懸命育てようとする「ぼく」の気持ちを考えていく授業をし、最後に地域の駐在所のお巡りさんからの手紙を紹介した。

北里小学校2年生のみなさん、こんにちは！北里駐在所のおまわりさんです。みなさん、元気にしていますか？今日は北里駐在所に来るツバメの話をしたと思います。

今年は駐在所にツバメは来ていませんが、去年までは毎年のように巣作りに来ていました。春になり、親ツバメが毎日一生懸命巣作りに励み、たまごを産んでいるのを見つけました。たまごからヒナがかえると、雨の日も風の日も親ツバメが餌を取ってきては、大きな口を開けて待っているヒナたちに一生懸命餌をあげている姿が見られました。

ある日、1羽のヒナが巣から落ちているのを見つけました。ヒナの命を助けようと思い、はしごに登り巣に返してあげました。しかし、残念なことに次の日、同じヒナが巣から落ちて死んでいました。とても、悲しい思いでした。でも、他のヒナが成長して大きくなり巣立っていくのを見たとき、「死んだヒナの分まで強く生きているんだなあ。」と感じ、命ってすばらしいと思いました。

2年生のみなさんも小さな命や自分の命を大切にしてください。また、学校の行き帰りに駐在所の前を通ったとき、おまわりさんを見かけたら元気に挨拶してくださいね。

近くの駐在所のお巡りさん。学期末の集会などで安全について話をしていただいたり、登下校で声をかけていただいたりすることもあり、子どもたちはお巡りさんに大変親しみをもっている。安全、防犯という常に「命」と向き合った仕事の中で、ツバメの小さな「命」にもやさしく目を向けているお巡りさんの話は、子どもたちに大きな感動を与えた。

(3) 授業の実際

*集団宿泊活動をもとにした授業

子どもたちが、寝食を共にし、活動する集団宿泊体験は、「心」を耕す上で大切な体験である。「体験してよかったね」だけでなく、日々の生活や次の活動にどのように繋げていくかがとても重要になってくる。6年生の実践を通して、授業のあり方について考えてみたい。

1. 主題名 公共の場を大切に [4-(1) 公德心]

2. 資料名 「ふくらんだリュックサック」 (文溪堂)

3. 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

公共物や公共の場をみんなで大切に使うことは、当たり前のことである。しかし、当たり前のことが、なかなかできていないのが現実である。川や公園に捨てられたゴミ、町の中に見られる落書きなど、少し周りを見渡せば、いろいろなものを見つけることができる。

このようなことが起こる背景には、次のようなことが考えられる。家族や小さな集団など限られた範囲内では、周囲の目が気になり共有のものを大事にしていこうとする意識が強く働く。しかし、道路や公共の場などでは、自分には直接関係がないという意識で、「少くくはいいだろう。」「みんなが、しているから、自分も……。」と、ゴミを捨てたり、周囲を汚したりと、あまり大切にしない人がいる。よごれなどが目立ってくると、さらに事態は悪くなっていくのである。

そこで、自分の体験活動を振り返りながら、資料の「わたし」に共感し、「ぼくも、同じことを感じたことがある。」「ごみを拾うのは面倒くさく感じるけど……。」と自分の思いを出しながら、公共物や公共の場所を大事に使おうとする態度を養っていくことは、本校のめざす『自分を見つめ、共によりよく生きていこうとする子どもを育てる』ことになると思う。

(2) 児童の実態

子どもたちは、6年生になって、委員会やたてわり活動の計画や実行、1年生のお世話など、学校全体のことや集団のことを考えながら、最上級生としての自覚をもってふさわしい行動をしようとする姿が見られた。

また、作文や日記などを読んでみると、「通学路に歩道がないので危ない。班長として安全に気をつけてみんなを連れてきたい。」「お父さんが、車に乗ってメールをしているのは危ないのやめてほしい。」など、家庭や地域のことに鋭い目を向け、社会的規範と照らし合わせながら、自分の規準で「良い」「悪い」を判断し、行動をしていこうとする姿も見られる。

先日の集団宿泊活動でも、飯盒炊飯や浜活動をした後、自分たちが材料や用具を入れて持ってきたビニル袋などが、あちらこちらに散らばっていた。活動の最後に「来たときよりも美しくしよう。」と呼びかけると、一生懸命にゴミ拾いなどに取り組むことができた。自分たちが出したゴミだけでなく、周りにあったゴミも拾っていく姿が見られた。

ただ、普段の生活を見ていると、自分で自覚してゴミを出さないようにしたり、意識して出し

たごみの始末をしようとしたりして、次の活動や使う人のことを考えて行動しているなど感じることはあまりない。

この学習を通して、学校、地域の状況などを考えながら、ただ「ごみを出したらあかん。」と言っているだけでなく、自ら行動していくことの大切さに気づかせていきたい。そして、7月の遠泳の後に行う「佐波江浜清掃活動」につなげていきたいと考える。

(3) 資料について

「川のごみ」「落書き」「きたない公園」…。これは、子どもたちが国語の時間に『わたしのうったえたいこと』で書き出したテーマの一部である。その中で、「みんなの使う町だから自分から進んで、自分の町を美しくした方が、心がすっきりして、自然がもっと美しく見えるのじゃないのかなあ・・・。」「自分で出したごみは、家で捨てたらいいと思います。」と、自分の考えを述べている。これは、わたしや両親、地域の人たちを意識して、自分の思いを述べているのである。

本資料のわたしも山の状況を見て、いろいろ理屈をつけている。でも、いつものように弁当を広げるだけで、何かをするという行動には至っていない。

わたしは、はっとした。人が多すぎるとか、よごれていていやになったとか、いろいろ理くつをつけていくだけの自分がはずかしくなった。

「さあ、拾おう。」

父親は兄弟に言ったのだが、わたしには、それがわたしへの心の命令でもあるように感じられた。

偶然、親子の会話を聞き父親が兄弟に言った一言「さあ、拾おう。」が、わたしへの『心の命令』のように感じた。思いから行動を起こすまで、人は大きなエネルギーを必要とする。ここで交わされる親子の会話が、わたしの心の中を象徴している。子どもたちには、ごみを拾い集めるまでに至るわたしの思いを考えさせていく。最後の「尾根をわたる山の風が何とも心地よかった。」と感じた気持ちの変化をとらえさせていくことで、学校や住んでいる町、使っている施設など公共の場の秩序をどのように維持していけばよいのかを、もう一度自分なりに考えていく場としたい。

4. 主題追究の手だて

(1) 体験活動について

5月24日から2泊3日で、三重県に集団宿泊活動に出かけた。飯盒炊飯や海の活動などを通して、自分の力で行動することを体験してきた。めあての一つに「公衆道徳（みんなのマナー）の大切さやきまりを守れる自分になっていこう！」を掲げて活動をしていった。そのことを意識してか、借りた飯盒や鍋など、汚れたものをピカピカにして返そうと一生懸命に磨く姿がみられた。また、食事をした場所や活動した場所を振り返り、ごみ拾いなどに一生懸命に取り組む姿があった。ただ、どうしても時間的な制約等で、最終的には「ごみを拾おう」と、指示されて動くことになってしまった。自分たちが声をかけあって行動するまではできなかった。

海浜活動で海岸に打ち寄せられているごみなどを見て、「いつも家から行く海はきれいなのに、

なぜ、こんなにいろいろな物が落ちているのだろう。」と、つぶやいている子がいた。最後にゴミ拾いをしたときにも、自分たちが出した物だけでなく、プラスチックや発泡スチロールの箱などを集めてきて、登茂山の所長さんに「ありがとう。」と声をかけてもらっている子もいた。

7月には、佐波江浜で遠泳をした後、浜の清掃活動を行う予定をしている。7月1日の琵琶湖の日に地域の方が清掃活動をしてくださっているが、それでもいろいろな物が落ちている。嫌々清掃活動をするのではなく、「使った場所を積極的にきれいにしよう。」「来た人が気持ちよく使えるように。」と、今回の学習を清掃活動につなげていってくれることを願っている。

(2) 国語の学習の中で

国語の「わたしのうったえたいこと」で多くの子どもたちが、ゴミや落書きの問題に触れて自分の意見を書いていた。

ポイ捨て

私の家の近くには、たくさんのごみが捨てられています。とくに、おかしなふくろなどなどが多いです。堤防の方には、たばこや大きいごみがたくさんあります。テレビやパソコンもあります。ごみを捨てたら、堤防とかがきたなくなってしまう。なので、自分で出したごみは、家で捨てたらいいと思います。

さらに、友だちの書いたことを読んで、自分の考えを書かせていった。この意見に対しては、

わたしの家の前の桜公園でも、ごみがいっぱいあります。遊ぶときにじゃまになってこまるので、やめてほしいです。ごみ箱も置いてほしいです。

と書いた子がいる。多くの子が、「〇〇したらいい。」「〇〇してほしい。」といった考えや思いを述べている。相手を想定しての「訴えたいこと」であるので、例えばごみを出した不特定の人には目を向けていたり、一般的な要望を書いていたりする。それを見て、意識の中には「わたしは、ごみを捨てたりしない。」という思いはあるが、今、落ちているごみを何とかしようということはほとんどない。実際に公園にごみが落ちているのを見つけたとき、「わたしは、拾う。」のか「やっぱり、そのままにしておくのか。」と、この授業を通して自分の行動を問い直していくきっかけになってことができると考える。

5. 評価の観点

- ・今までの学習とつなげながら、自分の考えを持ち、発表していこうとしているか。
- ・「わたし」のごみを拾おうとする行動に至るまでの心の中を自分なりに捉え、友だちの意見を聞きながら、違いを見つけて考えていくことができたか。
- ・公共の場の秩序維持のためには、きまりを守るだけでなく行動することの大切さにも目を向けられたか。

6. 本時のねらい

〇きまりを守り、進んで学校や地域の公園など公共の場の秩序維持に努めようとする態度を養う。

7. 本時の展開

学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点
1. 集団宿泊活動の中で、後始末をしていて感じたことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいにすることは大切だと感じた。 ・面倒くさいので後始末はいやだ ・それぞれの係があるのだから、係の人がやればいい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動を振り返るために、写真を見せる。 ・体験していた中で出ていた本音の思いもださせたい。
<p>2. 「ふくらんだリュックサック」を読んで話し合う。</p> <p>①「わたし」が後悔したのは、どんな気持ちからでしょう。</p> <p>②親子の会話を聞いていた「わたし」はどんな思いだったのでしょうか。</p> <p>③父親が兄弟に「さあ、拾おう」と言ったとき、「わたしは」どんなことを思ったでしょう。</p> <p>④山の風を心地よく感じている「わたし」は、どんなことを考えているのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・落書きをしている人と同じで、周りのことを考えていない若者にいやな感じがした。 ・ゴミがいっぱい散らかっていて汚いなあ。 ・やっぱりきたなくていやだなあ ・わたしが1つや2つ拾ったところで、どうにもならないなあ。 ・わたしも一緒にゴミを拾っていい。 ・どうしよう。拾おうか。拾うまいか。 ・わたしには関係ないことだ。 ・一緒にゴミを拾って、すっきりした気持ちになったなあ。 ・迷ったけれど、思い切って行動してよかった。 ・この気持ちをみんなにも感じてもらえたらなあ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場面の絵を提示することで「わたし」の様子をとらえさせ、気持ちに共感させていく ・自分たちの思いとつなげながら、山に登ったことを後悔している「わたし」の腹立たしさをとらえさせる。 ・子どもたちと同じような思いをいただいている「わたし」をとらえさせる。 ・空きかん拾いを始めた父親の姿を見た「わたし」の気持ちの変化をとらえさせる ・「心の命令」と感じている中には迷いがあり、その迷いに共感させたい。 ・ゴミを拾ったことに満足している気持ちをとらえさせる。 ・傍観しているだけでなく、行動に移すことの素晴らしさに気づかせたい。
3. 今まで、みんなが使う場所で気持ちよく使えたことについて発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミを拾ったので、すっきりした ・きれいなトイレは気持ちよかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・行動してよかったことや、気持ちよく使えた経験などを交流していく。

4. 教師の話聞く。

- ・ごみを拾いに山に登る人たちや地域でのクリーン作戦に取り組む人たちの話をする。
- ・7月に行う遠泳の後の清掃活動についても触れておく。

7. 指導の考察

(1) 体験活動について

国語の学習や集団宿泊活動の体験をもとに学習を考えた。子どもたちは、生活の中でごみや環境について、問題意識をもって生活しているのがわかる。ただ、意識と行動とは別で、身近な教室や廊下のごみ、掃除の仕方などでは、なかなか行動につながっていない。本時では、導入として、飯盒炊飯の後始末を取り上げた。この経験から資料の「わたし」の迷いに共感し、自分との思いの違いに目を向けることができる考えた。

(2) 体験活動を生かした道徳の時間の工夫

① 写真から体験を思い起こす

この時間の導入で、次ページの写真を提示して、後始末をしていて感じたことを発表させた。後始末の写真を見て、子どもたちは、「めんどくさい。」「早く部屋へ帰りたいかった。」など思いを発表した。

「後始末してよかったな。」と、がんばった思いをだした子もいる。「でも、大変やった。」という思いが発表されたとき、多くの子どもたちがうなずいていた。その後、浜活動での清掃についても、思いを尋ねた。

「言われたらするけど、進んではしない。」と、言う子が多くいた。公共の場をきれいにしなければいけないことは理解できるけど、実際に自分たちが行動することはためられるという子どもたちの意識が、写真を使って自分たちの体験を思い出すことによりはっきりした。

② 評価の観点から見た子どもたちの学びの姿

- ・今までの学習とつなげながら、自分の考えを持ち、発表していこうとしているか。

上でも述べたように、自分たちの体験とかかわらせながら、自分の思いや考えを発表していくことができた。また、資料でも「わたし」の思いを自分なりに考えて、発表していくことができた。

- ・「わたし」のごみを拾おうとする行動に至るまでの心の中を自分なりに捉え、友だちの意見を聞きながら、違いを見つけて考えていくことができたか。

「山の風を心地よく感じている「わたし」は、どんなことを考えているのでしょうか。」と問いかけたとき、「その人（わたし）には、父親が神様に見えた。尊敬した。かっこいいなと思っ



飯盒炊飯の後始末の様子

た。」と、発言したA児。彼は、その前の活動で「父親が兄弟『「さあ、拾おう。』』と言ったとき、『わたしは』どんなことを思ったでしょう。」の問いに「あー、ぼくもやらなくては……。だけど、勇気がいるし、あの3人だけでだれもやっていないし …。」と、迷いの気持ちに共感していた。

その後、「今度来たとき、きたなかったら いやだから、わたしも、拾う。」という発言をした子がいる。そのとき、A児が「心が揺さぶられてきた。」とつぶやいた。その一言が、A児の心に響いたようである。そして、彼の心の中で、もう一度自分の思いを問い直し前述の発言につながっていったのである。『わたし』の思いを述べているけれど、「尊敬した。かっこいいな。」と感じているのは、紛れもなく彼自身である。それは、自分の思いを述べている彼の表情からもわかった。

- ・公共の場の秩序維持のためには、きまりを守るだけでなく行動することの大切さにも目を向けられたか。

「今まで、みんなが使う場所などで気持ちよく使えたことはないですか。」の問いにB児は、「家族で海の民宿に行ったとき、ごみを拾った。気持ちよく感じた。」と自分の体験を発表している。この後、国語の学習で「わたしの主張」を書いたときも、「つりのごみを自分は積極的に拾っていきたい。」と述べている。B児だけでなく、クラスの子どもたちが、行動することの大切さを感じる事ができた。

(3) 授業後の子ども姿

7月の終わりに、佐波江浜で遠泳大会を開催した。この後には、恒例になっている浜清掃を行った。当日は、風が強く荒い波の中で1km泳ぎ切り疲れているにもかかわらず、一生懸命に清掃活動に取り組むことができた。授業の最後に、清掃登山のことを取り上げながら、この活動についても触れておいたことで、子どもたちの意識の中で、道徳の授業が生きていたと考えられる。



泳いだ浜をきれいにしよう

(4) 成果と今後の課題

*高学年になると、様々な場面で「どうすることがふさわしいのか」知識としてわかっていることが多い。そのため、下手をすると建前だけの発言で終わってしまう。普段から、クラスの雰囲気の本音で話し合えるように心がけてきた。先に述べたように、本時の導入でも、後かたづけについて「面倒くさい」「あまりしたくない。」など、正直に答えている。そして、授業の中で何度か友だちの発言を聞いて『こういう思いこそ本音やで。』というつぶやきが聞かれた。次第に、資料の「わたし」の思いを考えていく中で、「わたしも、ちょっと拾いたくなかった。」「勇気がいるなあ。」と、心の揺れが見られる発言が増えてきた。「面倒くさい」は本音だけれども、「みんなの場所をきれいにするために、自分からごみを拾いたい」という気持ちも人の心の中にある本音であることに気づき、絶えずその中で揺れ動いていることを感じていった。子どもたちのつぶやきを大切に、どう返していくかによって、子どもたちに道徳的な価

値の自覚をより促すことができると考えられる。

*学習の中では、子どもたち一人ひとりについて道徳性の育ちを認めていくことが重要である。そのため、自分の思いを書かせたり、授業の自己評価をさせたりする取組を行ってきた。道徳の授業は、どんな意見でも尊重されるところによさがある。個々の思いをしっかりとみとり、授業後の個々の変容などをとらえ、認めたりほめたりしていくことが必要になってくる。資料をしっかりとらえて深く考えていたり、友だちの意見を聞いて自分の考えをきちんともてていたり、個々の学びは様々である。その子どもたちの姿を授業の中でできるだけ活かしていくこと、また、日々の生活の中へとつなげて、認め励ましていくことが大切である。

*道徳の学習に取り組む中で、子どもたちの中に意識して話を聞く姿勢が出てきた。今までも、『聞く』ことに焦点を当てて研究してきたが、子どもの意識の変化をあまり感じなかった。この研究を通して、人の話を聞くことは「自分の心に響く」、「心に何か感じるができる」という意識がでてきたように感じる。

「手のひらのかぎ」を学習したとき、最後の感想に「山本運転手の行動に感動した。そして、先生の話にも感動した。」と書いてくれた子がいる。説話の中で、自分の生まれたときの両親の思いを子どもたちに伝えた。そのことが、学習とつながって子どもたちの心に響いたのである。道徳の授業をしていて、感動を受けた瞬間でもあった。

3. 考察

(1) 集団宿泊活動をもとにした主体的・対話的で深い学びへ

集団宿泊活動に行くと、様々な経験ができる。海浜体験で海の生物の生態に触れることで生命の尊さを感じたり、ウミホテルの観察で海の環境のことを考え自然愛護について学んだりすること、また集団で生活することで、友情や信頼、公共の精神、集団生活の充実などを学ぶこともできる。

この授業では内容項目4-1「公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら義務を果たす」に焦点を当てた。主題追究のたぐいで述べたように、地域や公共の場でのゴミについては、子どもたちなりの考えを持っている。それが、行動とつながっているかという点と難しい面がある。導入で集団宿泊活動の後始末を取り上げたことで、資料の中の「わたし」の状況により共感できるようになった。集団宿泊活動の中で「ゴミ拾いをしなくてはいけないけれど、だれもしていないので・・・」と思っている自分と資料の中の「わたし」の迷いが共感を生む。上述したA児のように「あー、ぼくもやらなくては・・・。だけど、勇気があるし、あの3人だけでだれもやっていないし・・・。」と「わたし」の迷いに共感していたのが、「今度来たとき、きたなかったら いやだから、わたしも、拾う。」という友だちの発言を聞いて、「心が揺さぶられてきた。」とつぶやいている。「心が揺さぶられる」状態とは、自分の迷っている気持ちが真剣で、それが葛藤している状態である。集団宿泊活動での自分の心の動きがもとになって、資料の「わたし」を通して考え、友だちとの交流の中で価値の葛藤が生まれてきたのである。

そして、最後の場面では「父親が神様に見えた。尊敬した。カッコいいなと思った。」と、ゴミを拾うという行為のきっかけとなった父親の言葉を、すばらしいものとして受け入れている。自分が思ったり、感じたりしたことが、友だちとの話し合いの中で、「ゴミを拾う」という思いに結びついていった。

この学習をした後の子どもたちの行動は、教室や廊下のごみにも目を向けることが多くなった。A児は特に意識して行動しているように感じた。「よく気がつくね。」と声をかけると、うれしそうに笑顔になる。

卒業をする前に子どもたちの提案で行った「感謝の活動」では、クラスの子どもたち全員が一生懸命に担当の掃除を行った。A児は、低学年のトイレの担当で、便器や床を、心をこめて磨いた。次の日の朝、登校してきた2年生が、担任の先生に駆け寄り「先生、トイレが昨日と違う。ピカピカや。」とうれしそうに話したことを聞いた。クラスでそのことを話すと、どの子もが満足した表情をしていた。

(2) 道徳の授業のよさを共有する

「道徳が好きだ。」という子が多くいる。授業の中で、主人公に託した自分の思いを出し合う場で、自分の思いに間違いはないので安心して発表できるからである。「たくさん発表できるから、道徳が好き」と言う声も聞かれる。子どもたちが道徳の時間を楽しみにし、よく発言するようになった。更に、じっくりと主人公の思いを考えさせたり、自分の考えを話したりすることに充実感を味わう子が出てきた。書く・話すなどの表現方法を選び、自分の内面を表現できる子が増えてきた。

教師の側からは、自分の思いを素直に表現できるような雰囲気作りを心がけるようになり、基本である学級経営を見つめなおすことができた。子どもたちが、「この仲間や、この先生には何を言っても大丈夫だ」という安心感をもてるように、また、一人ひとりの子が「このクラスにいてよかった。」と思えるように、言動に注意したり、一人ひとりへの言葉がけを大切にしたりすることをより意識するようになった。そのことによって、子どもたちの中に、クラスの仲間を認めようとする意識も育ち、全員が自分の思いを話せるようになった。

(3) 道徳の授業のもつ力を実感する

終末に先生が話をすることが多い。生命尊重の価値項目のとき、子どもたちに自分の出産の体験を語ったり、勤労・奉仕のときには、祖父の仕事ぶりを語ったりして、その学習が少しでも心に残るようにと工夫をする。そのときの子どもたちは、真剣に話を聞いてくれる。

6年生の子どもたちと「手のひらのかぎ」を学習した後、自分の姉の死とその後の両親の思いについて語った。ある子の授業の振り返りには、「感動した。」と一言だけ書かれてあった。このときから、クラスの雰囲気が変化したのを実感した。帰りの会でざわざわした雰囲気がなくなり、真剣に話を聞く姿勢ができてきた。ザワザワしていても話し始めると、「話を聞こう。」という声が出て、静かになる。今までは、何とか話を聞かせようとしていたのが、全く違う風景に出会った。道徳の授業をすることの素晴らしさを実感した。

多くの先生方にも、体験してもらえたらと思っている。

子ども学科・准教授